

月見の風習 —中秋と十三夜を中心に—

古屋 昌美

はじめに

一般に「天文民俗」と呼ばれる分野の中で、人々に広く知られているもののひとつが「お月見」でしょう。漆黒の闇夜を明るく照らし、日々形を変えることで暦をももたらした月の存在は古代人にとって時に昼の太陽よりも重要な存在であったことは想像に難くありません。今回は月見の風習とその成り立ちを十五夜と十三夜を中心にご紹介します。

1. 古代人と月

「観月」を特別なものとしたのはいつ頃からなのか、定かではないものの縄文の頃にはすでに存在したという見解があります。中国では儒教の経典とされる(偽書という説もあり)『周礼』の中に中秋という言葉が初めて登場、宮中儀礼として始まった観月の風習は魏・晋の時代には民間でも行われるようになり、唐代に入ると「中秋節」という祝日となります。日本では平安時代初期、月見の風習をあらわす文献の初出として菅原道真の師・島田忠臣(828-892)の漢詩が挙げられます。観月の宴として明確に記されているのは村上帝が催した康保3(966)年のものとされ、宮中での観月文化は奈良~平安時代初期にかけて定着したと想像されます。

2. 庶民のお月見

一方、現在も残る月見の風習の骨格がほぼできあがったのは近世とされます。宮中で始まった観月の文化は、古来の月への信仰に大陸からの思想や文化が習合して徐々に日本としての「月見のかたち」がつくられました。人々にとって満ちる月は豊穰の象徴であり、収穫を迎える「秋の満月」への感謝と祈りといった農耕儀礼としての性格を軸にして現在ある姿へと定着していったのでしょう。ススキや萩を飾ると共に里芋などの収穫物や収穫物を使って作られる月見団子をはじめとする供え物をしつらえて月見をするスタイルは、供え方や組み合わせに多種多様な違いはありますがほぼ全国で見られるものです。中でも里芋を供えることは稲作が盛んになる以前から主食とされた里芋の収穫に関係すると考えられています。また江戸では遊興のひとつとして川や池に船を出しての観月も盛んとなり、隅田川や上野の不忍池といった月見の名所もこの頃にできました。

3. 中秋とその風習

「中秋の名月」という名称は旧暦の7・8・9月を秋とし、真中となる8月15日の「十五夜」の満月(旧暦上の満月であり現在の天文学的満月とは必ずしも一致しない)を観ることを指します。各地域の風習はあまりにも多いためその一部を紹介いたします。

(以下は、七夕・月見にまつわるサイトを運営していた際にメールを通じて寄せられた情報やネットでの検索で収集したものの一部になります。)

ススキを利用

* 十五夜の膳に茅の箸を供える(東京都)

- * 茅で作ったお箸を15組供え、子どもたちが各家をまわり茅の箸をつかって野菜やごはんを一口ずついただく（山梨県）

使い終わったススキは？

- * 家の門口や垣根にさしておく（栃木県、群馬県、埼玉県、東京都、千葉県）
- * 畑の畔に刺しておく（静岡県）
- * 燃やして灰にし、人が通らない場所に埋めておく（千葉県）

獅子舞します

- * 江戸期から地域に受け継がれる伝統の獅子舞を奉納（静岡県下田市）
- * 十五夜の前夜（旧暦8月14日）「虎舞」と呼ばれる舞を奉納（静岡県南伊豆町）
- * 子どもたちが各家をまわって獅子舞をする。（沖縄県宮古島）

綱引き+相撲

- * 十五夜綱引き。材料を集めた子供たちが綱をつくり、綱引きをする。使った綱はその後土俵に仕立て直して相撲を取る。使った縄(藁)は持ち帰ると1年健康に過ごせるとされた。（熊本県、宮崎県、鹿児島県）

ちょっと七夕みたい

- * 十五歳を迎えた女の子が月明かりの下で針に糸を通してぬか袋を縫うと裁縫が上手くなる（岡山県）
- * 月明かりで縫い針に糸を通すことができると裁縫が上達する（北海道江差町）

のぞいたら願いがかなう？

- * 里芋に穴をあけ、穴から月をのぞいて願い事をするとかいう。（大阪府堺市・河内長野市）

お月見…それって何ですか？

- * 周辺や郷土史を調べてもお月見の風習や記録がない。
お供えも行事もなかったが、現在は行っている家庭もある。（香川県小豆島）

全国に観られる「月見泥棒」

- * 中秋や十三夜にお供えや畑の作物を取っても良いとされた風習。おもに許されたのは子どもたち（月の使者とされた）だが、大人が行うのを許された地域（新潟県朝日村等）もあった。作法も地域により異なり、必ず声をかける地域もあれば気づかれぬように行う地域もあるが、取られることで来年の豊穰や家内安泰を約束されるとしたのは共通。
例：「片足御免(秋田県)」どこの畑の作物でも一つもらってよい。ただし、取ってよいのは畑に1歩踏み出した範囲のみ。

<風習が確認できた主な地域>

北海道音別町・福島県白河地方・茨城県岩間町・日立市・千葉県君津市・富津市・木更津市・東京都多摩地区・山梨県甲府市・静岡県浜松市・下田市・三重県四日市市・桑名市・鈴鹿市・愛知県名古屋市・一宮市・日進市・東郷町・長久手町・奈良県生駒市・大阪府岸和田市・河内長野市・枚方市・四条畷市・大分県大分市・etc.

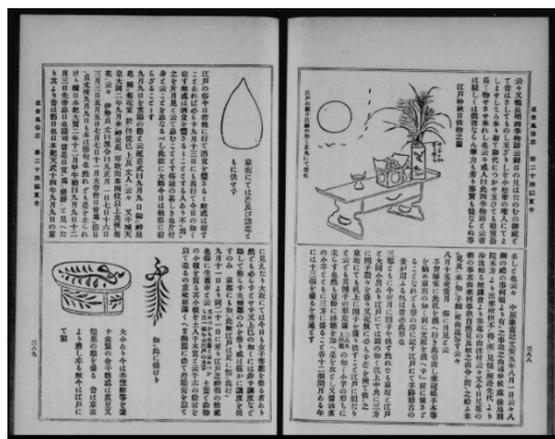


お月見泥棒の様子

4. 十三夜と片月見

9月13日の月を観る「十三夜」は日本独自の風習とも言われます。気候的にも台風シーズンを終えて天候が安定する頃で「十三夜に曇りなし」という言葉も生まれています。十三夜の発祥は諸説ありますが藤原宗忠(1062-1141)の日記『中右記』には宇多帝（この時はすでに譲位・出家し法皇）の延喜19(913)年9月13日の月を「無双」と評し月を愛でたという記述があり、次代の醍醐帝の御世から十三夜の観月の宴を始めたとあります。宇多帝と同時代に活躍した三十六歌仙の凡河内躬恒の家集には9月13日の日付で十三夜の月を詠んだ歌があり、西行(1118-1190)の山家集にも中秋よりも十三夜を推す歌が見られます。松尾芭蕉の著書の中にも十三夜の由来に宇多帝の名前があり、江戸期の教養人の中では由来の逸話として知られていたことがうかがえます。

十三夜で有名な、中秋を見たら必ず十三夜も月見をしなければ「片月見」とされ縁起が悪いとする風習は収穫祭の意味合いを持つ農村地域で今も残りますが、江戸の遊興地で言われるようになったのが拡がった原因ともされます。江戸後期の風俗事物を書いた北川守貞の『守貞漫稿』には「俗諺甚だしい」という記述もありますが、この風習が遠く北海道の江差町へも伝わっており町史に「十五夜と同じ場所で月が見られると吉事があるといわれ、見られぬ時は片見月と称して凶事があるとされ月の出方により吉凶を占った」と記載されているのは興味深いことと言えます。



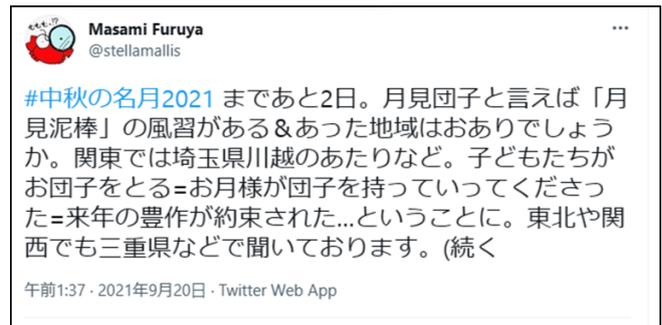
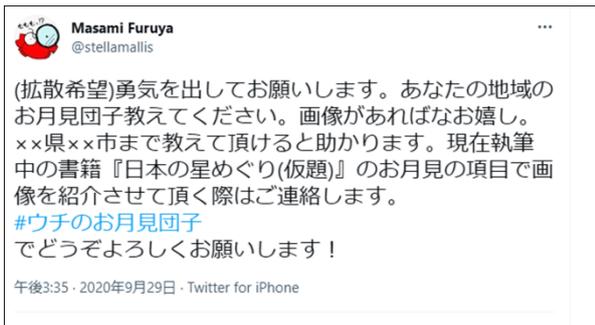
類聚近世風俗志（守貞漫稿）片月見の記述箇所

5. 三度目の月見・十日夜

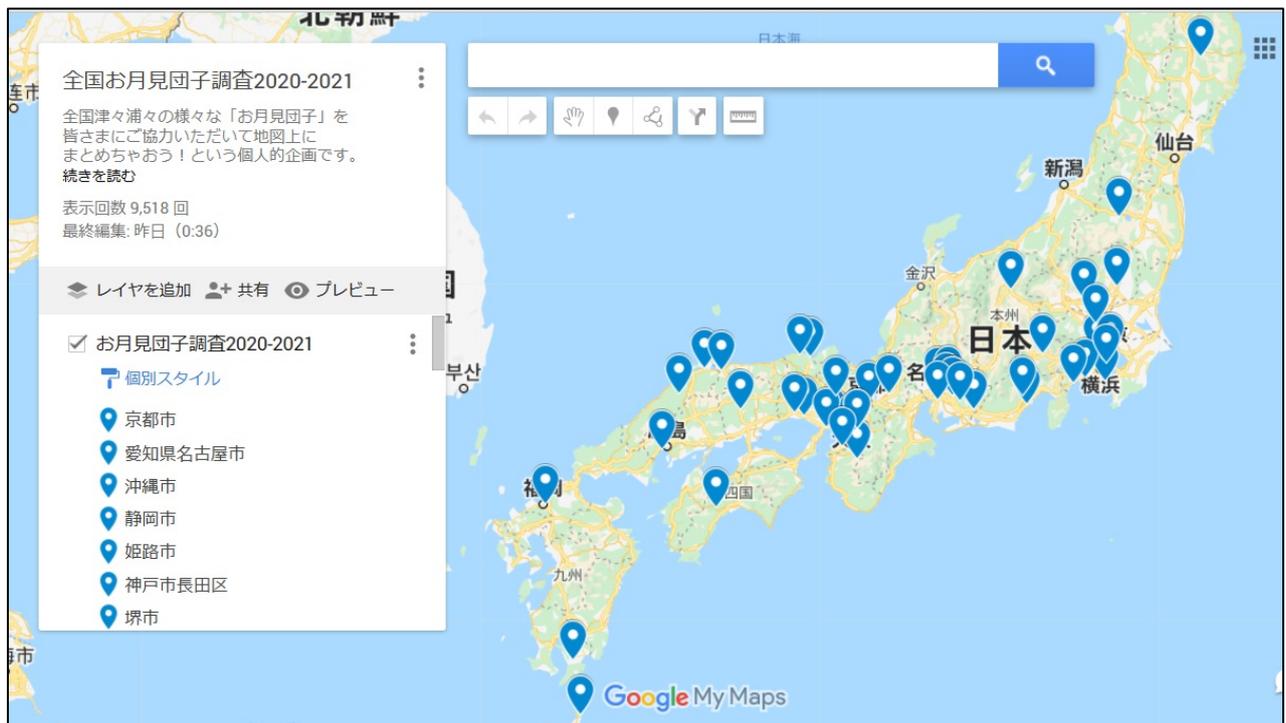
旧暦10月10日の月を見ながら、田の神を山へ見送るとされる「十日夜（とおかんや）」は、3度目のお月見とも表現されますが、その内容は観月よりも農耕儀礼が色濃く残るものです。主に東日本で見られ、子どもたちが藁でつくった藁鉄砲と呼ばれるもので地面をたたきながら（モグラやネズミ除けの意味があるとされている）家々をまわり歌を歌います。西日本では旧10月の亥の日に行われる「亥の子」と呼ばれる風習に類似が見られ、藁鉄砲や亥の子石と呼ぶ石で地面をたたきながら歌を歌い家々をまわります。関東では十日夜と亥の子の風習が混在する地域もあることがはやし歌から見受けられ、今後さらに調査を進めたい分野です。

6. お月見団子マップ 2020-2021

各地域の風習に関する調査は、資料収集と共に現地での聞き取り調査が基本ですが、ここ数年は covid-19 の流行による行動の制限があり、実際に地域へ赴いて聞き取りや調査を行うことが難しい状況となっています。筆者は以前より SNS による天文現象や天文民俗の発信をおこなってきましたが、昨年実験的に Twitter を通じて月見団子の情報を募ったところ、中秋(2020/10/1)から十三夜(2020/10/29)までの間に約50件の情報が寄せられました。その中には添付画像も何件もあり、貴重なものは資料として用する許可も頂くことができました。今年と同様に情報を募り、寄せられた情報を Google マップ上にまとめて可視化する試みをおこないました。



2020年の月見団子情報募集のお願い（左）と2021年の中秋の時期に7日間連続で投稿したツイートの一部



全国お月見団子調査 2020-2021 の Google マップ。

全国お月見団子調査マップは12/11現在、50地点・80件を超える月見団子に関する情報が入力され、表示回数も9500回を超える関心をいただいております。件数はまだ多いとは言えないものの、マップとして可視化されたことで「ごく普通なものだと思っていた自分の地域の月見団子が、実はそうではなかったことがわかり驚いた」という感想も寄せられました。このマップが多くの皆さまの目に触れることで、まだ知られていない月見団子や月見の風習が掘り起こされることを願っております。東北・九州・四国地域が少ないので、ご存知の方はぜひ情報をお寄せいただけますと大変ありがたく思います。お月見団子だけでなく地域の風習や子どもの頃のお月見の思い出など、なんでも結構です。ご興味のある方はweb上にて「全国お月見団子調査 2020-2021」でご検索ください。（筆者のTwitterアカウント：@stellamallisからも情報をお寄せいただけます）

<寄せられたお月見団子情報の一例>



72才のお母様からの聞き取り。

大阪府泉佐野市の山手では、丸い握り飯にゴマやきな粉をまぶしたものを、もろ蓋に山積にし、一升瓶に刺した萩と薄とともに縁側に供えた。小芋やサツマイモも食べた。

もっと昔は「握り飯突きに行く」といって、子供が握り飯を取りに行った。提供：nao sato さん(2021)

鳥取県米子市。白玉粉でつくった団子とかぼちゃを練り込んだ団子。味はつけていないので、きな粉をつけていただく。提供：もりちゃんさん(2020)



沖縄県沖縄市。「ふちやぎ」と呼ばれる小豆（塩味もあるが甘い味付けもある）をまぶしたお餅。提供：Nanae さん(2020)

<引用・参考文献>

太陽と月 =古代人の宇宙観と死生観= 民俗文化大系2 小学館

星の文化史大辞典 出雲晶子 白水社

月の誘惑 志賀勝 はまの出版

月と暮らす本 高橋典嗣 監修 洋泉社

日待・月待・庚申待 飯田道夫 人文書院

日本童謡伝承集成 第五巻 催事唄・雑謡 北原白秋 編

江差町史 第六巻通説二

コトバンク <https://kotobank.jp/>

星の民俗館（三上晃郎氏）HP <http://www.maroon.dti.ne.jp/starlore/>

中秋節の歴史 （China Highlights より）

HP <https://www.arachina.com/festivals/mid-autumn-festival/history.htm>

お月見泥棒はどこにある？（「わが街四日市」より）

HP <http://waga.yokkaichi.org/matsuri/tsukimi.html>

国立国会図書館デジタルアーカイブ